

次の英語と日本人英語学習者

上 村 俊 彦

English Next and Japanese ELF Learners

Toshihiko UEMURA

1. はじめに

国家間の垣根を越えた人と物の移動，時空を超えたインターネット環境の充実は，市井の日本人にも国際化の波が日常生活まで及んだことを実感させている。自らを取り巻く世界環境をふまえ，日本人はどのような英語力を身につけるべきか十分に検討する時期がきた。このような時代にあって，海外との交渉や情報発信のために日本人が英語を身につけることは，21世紀日本の国家戦略のひとつとなったと言っても過言ではないだろう。本稿では，日本人の国際的な英語能力試験成績や，世界共通語としての英語に関する近年の研究成果を踏まえて，今後どのような英語を日本人は学んでいくべきか考察する。

2. 英語能力試験

日本人の英語力の目安として，TOEFL，TOEIC，英検，IELTSの2006年度受検者の試験結果を概観する。¹⁾

2.1 TOEFL

TOEFLの開発元であるETSは，TOEFLを従来の紙ベース試験(pBT)やコンピュータ・ペー

表1. TOEFL cBT*

母 語	受験者数	L	S/W	R	スコア
Arabic	22,986	21	20	19	200
Chinese	48,443	20	22	22	210
Hindi	17,082	25	25	25	249
Japanese	78,255	18	19	20	191
Korean	130,316	21	22	23	217
Spanish	25,293	23	22	24	229
Turkish	21,220	21	21	21	213
(全体)	293,494	20.9	21.7	22.2	216

*ETS (2007b)の Table 7 と Table 9 から作成。

NB. L Listening, S/W Structure & Writing, R Reading

ス試験(cBT)からインターネット・ベース試験(iBT)に切り替えようとしている。2006年度は移行初年度に当たり、両方式の試験がともに実施された。ETS(2007a,b)によると、cBTの全受検者は293,494名、iBT全受検者は107,299名であった。表1(cBT)と表2(iBT)は、ETS(2007a,b)から1万名以上の受検者がいた母語グループの試験スコア情報を抽出したものである。

日本語を母語とする人々(以下、日本語母語グループ)の成績は、cBT、iBTともに最下位であった。それぞれのスコアを、ETS(2005)のTOEFLスコア関連表で換算すると、表1のcBT 191はpBT 520~523、iBT 68~70、表2のiBT 65はpBT 513、cBT 183に該当する。

cBTは3技能(「リーディング・リスニング・ストラクチャー/ライティング」)の試験で、満点300。表1から明らかなように、日本語母語グループの平均点は7母語グループの最低で、200に届いていない。ちなみに、cBTの最大グループは、13万名強が受検した韓国語母語グループで、その平均点217(iBTで81~82相当)は全受検者(29万名強)の平均216(iBTで79~81相当)を上回っている。

2006年度から、4技能対応のiBT試験(「リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング」)が導入された。(満点120)表2からも明らかなように、iBT試験の受検者数1万名を超える8母語グループの中で、アラビア語母語グループと日本語母語グループのみが総合得点60台となった。

表2. TOEFL iBT*

母語	受験者数	R	L	S	W	スコア
Arabic	15,747	14	18	19	17	67
Chinese	33,876	19	19	18	20	75
French	13,768	22	22	21	21	86
German	15,474	23	25	24	24	96
Italian	12,236	20	18	16	17	71
Japanese	18,100	15	17	15	17	65
Korean	33,479	17	19	17	19	72
Spanish	20,971	21	22	21	20	84
(全体)	107,299	19.5	20.5	19.0	20.0	79

*ETS(2007a)のTable 7とTable 9から作成。

NB. R Reading, L Listening, S Speaking, W Writing

日本語母語グループのiBTのL・S・Wの各スコアと総合点は、8母語グループの中で最低点となった。なお、iBTの満点は各技能30、総合点120であるが、ドイツ語、フランス語、スペイン語を母語とするグループは4技能スコアのすべてが20以上で、総合点平均は、96、86、84であった。これらの3母語グループと日本語母語グループとの総合点格差は19~41となった。

ETS(2007c)によると、TOEFL iBTはCommon European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment(CEFR)のB1~C1(6つのレベル)の英語能力評価に有効である。ちなみに、日本語グループのスコアcBT191とiBT65は、CEFRの低い方から3番目のB1レベル(independent user)に該当する。²⁾日本語母語グループのTOEFL cBT・iBT平均点は、ともに英語圏の大学に正規留学するために求められるスコアに届いていない可能性が高い。³⁾

2.2 TOEIC vs. STEP

日本英語検定協会ホームページによると、2006年度英検（STEP）の総受検者は2,448,929名。ただし、主な受検者が高校以上となる1級～2級は413,386名（総受検者の16.9%）にとどまった。（表3参照）英検合格者のうち、英検2級以上（82,641名）、準1級以上（12,65名）の英検全合格者（1,273,779名）に占める割合は、それぞれ6.49%、1.0%（ともに少数点以下第3位切り上げ）となる。

表3. 英検2006年度受験状況*

	1級	準1級	2級	準2級	3級	4級	5級	合計
受験者	24,076	71,211	318,099	509,872	698,490	505,108	322,073	2,448,929
合格者	2,456	10,198	69,987	183,655	375,472	359,897	272,114	1,273,779
合格率	10.2%	14.3%	22.0%	36.0%	43.8%	71.2%	84.5%	52.0%

* 日本英語検定協会(2007)から作成。

国際ビジネスコミュニケーション協会(2007b)によると、2006年度のTOEIC試験の総受検者は1,526,000名（公開テスト666,000名、IPテスト860,000名）で、過去5年（2002年～2006年）間の公開テスト平均点は、最低562、最高573であった。⁴⁾⁵⁾

TOEIC Proficiency Scaleで、「どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている」と評価されるレベルBは、TOEICスコア730～860である。公開テストスコア分布によると、スコア745以上の受検者は100,665名（全受検者559,724名）で、全受検者に占める割合は17.98%であった。（同掲書p.2参照）

英検資格を有する2006年度TOEIC受検者のTOEIC公開試験平均スコアは、英検2級540（172,533名）、英検準1級769（9,080名）、英検1級950（603名）であった。（同掲書p.7参照）TOEIC Proficiency Scaleで、英検資格保有者の2006年度TOEICスコア平均を見ると、準1級はレベルB、1級はレベルA（non-nativeとして十分なコミュニケーションができる）に該当する。

2006年度の英検合格率とTOEICの成績スコア分布から判断すると、多くの日本人学習者にとって英検準1級以上に合格、またはTOEICのレベルB（TOEICスコア730～860）取得をすることは難しいことのように思われる。

文部科学省が提示した3つの英語能力試験に基づく英語教員の英語力のうち「英検準1級取得」と「TOEICスコア730点」は、試験合格者比率やTOEICスコア分布が上位となっていることから概ね妥当と判断できる。しかし、「TOEFL pBT550」は換算でcBT 213 iBT 79～80相当であり、ほぼ2006年度TOEFLの全受検者の平均点（cBT216、iBT79）程度に過ぎないこと、CEFRではB1（iBT57～86）レベルにとどまることから、再検討が必要である。ちなみに、CEFRで1つ上のB2はiBT87～109相当である。

2.3 IELTS

イギリスやオーストラリア・ニュージーランドへの留学希望者が受けるIELTSは、受検者の4技能能力を試験するもので、リスニング（30分）・リーディング（60分）・ライティング（60分）・スピーキング（11～14分）の各試験から構成されている。表4は、IELTSホームページに掲載された2006年度受検者（academic candidate）の母語別平均点を示す。ちなみに、IELTSの最高ポイントは9である。

表4. IELTS 2006年度受検者平均スコア*

	L	R	W	S	合計
Arabic	5.53	5.52	5.23	5.93	5.62
Chinese	5.66	5.95	5.33	5.51	5.67
German	7.45	7.25	6.75	7.27	7.24
Japanese	5.87	5.86	5.33	5.8	5.78
Korean	5.87	5.87	5.36	5.72	5.77
Spanish	6.44	6.68	5.96	6.65	6.49

* IELTS(2007a)から、母語別受検者数上位20位から、
本稿の表2に掲載された母語グループを抽出。

NB. R Reading, L Listening, S Speaking, W Writing

日本語母語グループの総合点は、ドイツ語母語グループ・スペイン語母語グループのスコアには届かないものの、ほかの母語グループよりわずかに上位となった。IELTSに関する限り、日本語母語グループの英語力は、中国語・韓国語母語グループと伍していることになる。ただし、母語別または国籍別の受検者総数を IELTS(2007a)から特定できないため、実際の受検者数は不明である。

IELTS と TOEFL は、ともに非英語母語話者が英語圏の大学等へ留学する際に受検が必要となる試験であるが、この IELTS スコアと TOEFL のスコア（本論2.1参照）の分析結果は大きく異なるものとなった。国際的な英語能力試験で日本人の英語力を検証するためには、より詳細なデータによる分析が必要である。

3. World Englishes, International English & Global English

「国際語」または「世界語」としての英語を指す英語表現として、今日、「World Englishes」、'International English'、'Global English' などが多用されている。McArthur (2004) は、「国際語としての英語」を指す語彙 'World Englishes'、'International English'、'Global English' が近年の英米辞書、社会言語学や応用言語学の学術雑誌や新聞・雑誌の中でどのように使用されてきたか詳細に分析した上で、今日これらの表現が併存していることを「英語使用者」(English users) が特に問題視する必要がないことを指摘している。

Trudgill & Hannah (1982) は 'International English' を著書タイトルの一部としているが、本文の中には International の表記も定義もない。副題は 'a guide to varieties of standard English' であり、彼らは世界の主要な英語のパラエティー全体をさす言葉として使った可能性がある。'international' は、'English' 以外に 'English as an international language' ('language' の修飾語) として使用される。田辺(2004)は、『「国際英語」は「国際語」か』と題する論文の中で、'International English' と 'English as an International language' における形容詞 'international' の指示内容の違いを論じるとともに、Jenkins の中間言語談話理解のための「共通音声核」に着眼した。

日本での英語教育の観点で以上を概観すれば、次の3点に絞られる。まず、(1)教育的には、「国際英語」という英語を理解することが必要である。国際英語はけっしてイギリス型の英語でもなければ、アメリカ型英語でもない。これらの英語はモデルになるが、

「国際英語」ではない。さりとして、決して日本語のカタカナ英語でもない。次に、(2) ‘International English’ と ‘English has an international language’ という表現により、一般論として、語法による用語の慣用性と具体性、及びその解釈の仕方に対する注意が喚起される。加えて、(3)「国際英語」には発音の問題も関わる。日本語と英語の発音の相違を見極め、世界に通じる発音の共通核を見定めること。このポイントは、発音のモデルを身につける教師本人はもちろん、発展型の生徒、基礎型の生徒など、生徒に対する教え方と内容に変化を持たせることができる。教師が持つモデルと生徒に教えるモデル、それに生徒の発音技術の巧拙に対する配慮など、音声の共通核によって理解でき、教えることが可能になる。(田辺(2004:51))

日本人が英語を使った国際的なコミュニケーションを行う場合、音声面で目標とすべきは、既存の英米母語話者モデルではなくて Jenkins の「共通語音声核」に提唱する新しい英語モデルであるとの田辺(2004)の指摘は重要である。「共通語音声核」については、第5節で再度取り上げる。

Kachru, B. B. と Smith, L. は International Association of World Englishes (IAWE) の創設時からの主力メンバーで、1985年に言語学学術誌の編者を引き受けた際に学術誌の名称を ‘World Englishes’ に変更した。Kachru は、英語話者を English as a native language (ENL), English as a second language (ESL), English as a foreign language (EFL) の3者に分け、相互の関連性を同心円で示す「3つの英語同心円モデル」を提唱するとともに、社会言語学の視点から特に ‘Asian Englishes’ の研究に従事してきた。

In the Asian, and indeed in world contexts, modifier and noun relationship as in ‘English language’ has contextually, pragmatically, functionally, and ideationally altered substantially. Now the appropriate modifier-noun relationship is Asian Englishes, not Asian English, and world Englishes, not world English, or global English, or international English. This contextually appropriate hybridization and adaptation has been the fate of most human languages, particularly those that have crossed their historical boundaries and were planted in other linguistic and cultural ecologies. The English language, as any other present or earlier transplanted language, is facing its ecological karma, and is woven into the nativized webs of language structure and its functional appropriateness. (Kachru (2005: 255)) (下線 上村)

今日の英語の姿を、「世界の英語(複数形)」または「アジア英語(複数形)」と位置づける Kachru の視点は、「英語が使える日本人」の習得すべき英語モデル構築の際に留意すべきである。

Crystal(1997)は ‘Global English’ にしばしば言及するとともに、‘World Standard Spoken English (WSSE)’ という世界のさまざまな人々が相互に理解可能な国際標準口語英語についての考察をおこなっている。

Which variety will be most influential, in the development of WSSE? It seems likely that it will be US (rather than UK) English . . . the situation will be complicated by the emergence on the world scene of new linguistic features derived from the L2 varieties, which as we have seen will in due course become numerically dominant. No feature

of L2 English has yet become a part of standard US or UK English; but, as the balance of speakers changes, there is no reason for L2 features not to become part of WSSE. This would be especially likely if there were features which were shared by several (or all) L2 varieties - such as the use of syllable-timed rhythm, or the widespread difficulty observed in the use of *th* sounds . (Crystal (1997:138)) (下線 上村)

英語は国際間のコミュニケーションの手段として広汎に使用されており，英語を第2言語（ESL・EFL）として使用する人々の数は，すでに母語（ENL）として使用する人々の数をはるかにしのいでいる。Crystal(1997)は，WSSEに英語を第2言語として使用する人々の言語使用の特性が反映される可能性を指摘している。

‘global English’を主テーマとする学会が2008年2月ウィーン大学開催予定である。⁶⁾この学会の開催趣旨は以下の通り。

The aim of the conference is to provide a forum for the presentation of research discussing issues related to the role of English as a global language.

The debate over the status of English as an International language has flourished over the past few decades and is still open to new developments . Starting from the awareness of the undisputedly prominent role of English as a Lingua Franca in international communication, the fact that native speakers are currently a minority, compared to second-language users of the language, has been repeatedly highlighted.

The changing status of English has led to the emergence of a new linguistic scenery. On the one hand, the native varieties have become highly differentiated and acquired greater autonomy, while on the other, the rapid growth of a community of non-native speakers, thanks to increasing international exchanges, has triggered a reflection on the possible rise of a new International English, as opposed to the current native varieties. (下線 上村)

2月の学会では，コミュニケーション手段として英語が使われる中で，母語話者主体の英語から非母語話者による新しい「国際英語」の台頭の可能性について様々な討議が交わされるであろう。

4. English Next

英語が国際間のコミュニケーション手段として注目されるようになればなるほど，英語母語話者の位置づけが問われるようになってきた。Butcher (2005)や Graddol(2000)では，今後予測される英語母語話者の役割低下を論じている。

前述のウィーン大学主催の GlobEng の招待講演者の1人，Seidlhofer, Bは，「母語としての英語（ENL）」と「世界共通語としての英語（ELF）」とを峻別する。

The point I am trying to make . . . the ‘E’ in English as a Native Language is bound to be something very different from the ‘E’ in English as a Lingua Franca, and must be

acknowledged as such.

... that native-speaker language use is just one kind of reality, and one of very doubtful relevance for lingua franca contexts . . . we must overcome the (explicit or implicit) assumption that ELF could possibly be a globally distributed, franchised copy of ENL, and take on board the notion that it is being spread, developed independently, with a great deal of variation but enough stability to be viable for lingua franca communication . (Seidhofer (2001:137-8)) (下線 上村)

ENL が地球規模に広がったものが ELF でない。今日、ELF には多くのバリエーションが見られるが、共通語としての機能を果たすために必要な安定性は備えている。

Seidhofer は、現在、Vienna-Oxford International Corpus of English (VOICE) のプロジェクトリーダーである。Seidhofer (2004) によると、話し言葉コーパス VOICE には 3 人称単数形 -s の欠如した事例、関係代名詞 who と which を互換可能 (interchangeable) として使用した事例、不要な them の挿入事例、余剰性 (前置詞 discuss about . . . 名詞 black color) の事例などが多数見られる。このような英語の冗長性 (redundancy) を排除してしまう非英語母語話者の誤用は、標準的な英語用法を逸脱しているが理解可能な (intelligible) 発話であり、コミュニケーションの障害とならないため過度な正確さを求める必要はないと Seidhofer は考えている。

「世界共通語としての英語」は、必ずしも英語母語話者中心とならないことを主張するのは、Seidhofer に限らない。Graddol は 2006 年に出版した “*English Next*” でほぼ同様な主張を述べている。

An inexorable trend in the use of global English is that fewer interactions now involve a native-speaker. Proponents of teaching English as a lingua franca (ELF) suggest that the way English is taught and assessed should reflect the needs and aspirations of the ever-growing number of non-native speakers who use English to communicate with other non-natives . . . Within ELF, intelligibility is of primary importance, rather than native-like accuracy . . . ELF focuses also on pragmatic strategies required in intercultural communication. The target model of English, within the EFL framework, is not a native speaker but a fluent bilingual speaker, who retains a national identity in terms of accent, and who also has the special skills required to negotiate understanding with another non-native speaker. (Graddol (2006:87)) (下線 上村)

Graddol(2006) は、21 世紀の世界人口の推移や国際経済の展開予想をもとに、「次の英語」の実体に迫っている。

In a globalised world, the traditional definition of ‘second-language user’ . . . no longer makes sense. Also, there is an increasing need to distinguish between proficiencies in English, rather than a speaker’s bilingual status . Kachru himself, has recently proposed that the ‘inner circle’ is now better conceived of as the group of highly proficient speakers of English - those who have ‘functional nativeness’ regardless of how they learned or use the language . (Graddol (2006:110)) (下線 上村)

「次の英語」の主演は、英語を第2言語として流ちょうに話す非母語話者である。その英語は、たとえ母語話者の標準的な英語の使い方と異なり、彼らの第1言語や帰属する社会を思わせるような言語特性が認められても、円滑なコミュニケーションが可能な場合、彼らの英語能力は機能上「母語話者」並みとみなされる。

5. ELF Model

21世紀の英語による国際間コミュニケーションの増大は、これまでの母語話者主体の標準英語モデル重視から、数の上で大多数を占める非母語話者の存在を前提とした新しい英語モデル構築の必要性を高めることとなった。この非母語話者の音声モデルの特徴は、田辺(2004)によると Jenner の「共通核」(common core) から発展した Jenkins の「共通語音声核」(lingua franca core) にある。

Jenkins (2007)は、非母語話者間で交わされた英語の談話分析から、理解可能(intelligible)な英語であるために重要な英語音声学上の特性として次のものを上げている。子音('thin'や'the'のthの音素除く)、子音連結(consonant cluster)、音素弁別性に必要な長母音と短母音の区別(例'sit'と'seat'における母音の違い)、語句や文の意味区別に関与する抑揚(tonic stress)。逆に、現在の英語音声学で重視されている英語の音声特徴のうち、th('thin'や'the'の音素)、母音(例ドイツ語母語話者は'chess'の'e'を'cat'の[æ]に近い音で発音する場合がある)、曖昧母音 schwa(例'to'や'of'の弱形発音)、音声同化(assimilation)(例'red paint' 調音点が[p]と同化して[b]に変化)、語のストレス、ピッチ移動、強弱拍(stress-timing)の重要性は低いと見なしている。

Jenkins (2007)によると、非母語話者間の英語によるコミュニケーションは、条件付きで「日本語なまりの英語発音」でも可ということになる。これは、英語音声学の常識を覆す見解である。

第4節で言及した Seidlhofer は、英語学習者向けの英英辞典 *Oxford Advanced Learner's Dictionary* 7th ed. (OALD) のコラム "English as a lingua franca" で、ELF の紹介をしている。Seidlhofer(2005:R92)は、ELF コーパス VOICE の特徴として、3人称単数現在-sの喪失(例 she like)、関係代名詞 who と which の混同 (things who, people which)、定冠詞・不定冠詞の喪失 (he is ___ very good person)、不可算名詞の可算名詞化 (例 informations)、this (単数指示代名詞)の複数名詞との共起 (例 this countries)、makeの多様なコロケーション (例 make sport, make a discussion)、付加疑問の語形の固定化 (isn't it, no?), 他動詞への前置詞付与 (discuss about something, phone to somebody)、不要な名詞の挿入 (how long time, black color)を上げている。Seidlhoferによると、このような ELF の特徴は、標準的な英語表現ではないが、非母語話者の英語を理解する際の大きな障害にならない、むしろ、英語母語話者の固有の比喩表現や言い回し、イディオム、句動詞が ELF 話者の英語理解を難しくしていると考えている。⁷⁾

英語学習の目標を英語母語話者に置く人々には、Jenkins の「共通語音声核」や Seidlhofer の VOICE の語彙・文構造分析は、一見すると異質なものに映るかもしれない。しかし、ELF モデルのプロトタイプは、非母語話者の母語による干渉や犯しやすい誤用法も一部取り込んでおり、従来の英語母語話者モデルよりも非英語母語話者にとって身近な存在である。近年の国際化の波により、非母語話者同士が英語でコミュニケーションをとる必要が高まっている。今日、日本人は英語母語話者の「発音」や「文法」に拘泥しすぎることなく、世界の人々に理解可能な「日本人の英語」を模索すべき時代となった。日本の英語教育関係者は、国際間のコミュニケーション

の手段としての英語の呼び名は、「世界の英語」、「国際語としての英語」または「国際共通語としての英語」のいずれが妥当か議論に時間を費やすよりも、近年の Asian English(es) の実践研究も視野に入れた日本人のための「次の英語」モデルの構築に力を注ぐべきであろう。

6. 終りに

2007年4月、イギリスのアパディーンで第41回 IATEFL 国際学会が開催された。世界中の英語コミュニケーション専門家を集めたこの学会で、専門誌 *ELT Journal* の編者が司会者となってウィーン大学の Seidlhofer とスペインのカタルーニャ州教育省（英語教育担当）の Figueras, N がパネリストとなったシンポジウム（“English is too important to be left to the native speakers”）が開催された。当日の参加者として、ヨーロッパでは英語の非母語話者モデル（特に EU-English）の実践研究が盛んであるとの印象を強く持った。近年、「アジア言語としての英語」や「ヨーロッパ英語」が現実となってきた。Kachru の Asian Englishes や Jenkins や Seidlhofer らの ELF 研究から得られる知見は、日本人のための「次の英語」のモデル構築に不可欠な示唆をあたえるであろう。彼らの研究動向については、日本の英語教育に関係するものとして今後とも留意していきたい。

注

1) 文部科学省の「英語が使える日本人」では、英検（STEP）の級、TOEIC や TOEFL の試験スコアを英語能力評価の目安としている。

今後のグローバル化の進展の中で、「英語が使える日本人」を育成するためには... 日本人全体として、英検、TOEFL、TOEIC 等の客観的指標に基づいて世界平均水準の英語力を目指すことが重要である。（文部科学省（2003:1））

概ねすべての英語教員が、英語を使用する活動を積み重ねながらコミュニケーション能力の育成を図る授業を行うことのできる英語力（英検準1級、TOEFL550点、TOEIC730点程度以上）及び教授力を備える。（同掲書P.5）

2) ETS(2007c)によると、CEFR の各レベルと TOEFL iBT スコアの関係は、表5のようになる。

表5. TOEFL iBT スコアと CEFR レベル相関*

CEFR Common Reference Level			TOEFL iBT
Proficient user	C2	Mastery	
	C1	Effective Operational Proficiency	110-120
independent user	B2	Vantage	87-109
	B1	Threshold	57- 86
basic user	A2	Waystage	
	A1	Breakthrough	

* Council of Europe, Language Policy Division (2001)
Table1とETS (2007c)から作成。

2007年2月、ストラズブルグでは、欧州会議参加国の CEFR への取り組み状況を検討する会議が行われた。Martyniuk, W. & Noijons, J. (2007)によると、欧州会議参加国46国中

30ヶ国が前年2006月5月から9月に行われた調査の回答をよせた。CEFRは言語政策、教育、教員養成、試験などの指針・評価基準として各国に浸透している。CEFRが特に有効であると評価された調査項目には、カリキュラムやシラバス作成（回答29カ国中26カ国）、試験・習熟度評価等（回答30カ国中26カ国）、教員養成プログラム（回答27カ国中21カ国）があった。また、CEFRの外国語到達レベルや学習習熟度記述は特に有益とする回答も多くの参加国から寄せられている。（Martyniuk, W. & Noijons, J. (2007: 4.5.3)）

- 3) 留学フェアの場で、日本人に人気の高いオーストラリアの大学では、pBT570前後の英語要件を課すことが多いとオーストラリア領事館担当者から聞いた。ちなみに、オーストラリアのクインズランド大学が正規留学を希望する非英語母語話者に課す言語要件は、以下の通りである。

表6. English クインズランド大学言語要件*

IELTS Academic		TOEFL Computer based (cBT)		TOEFL Paper based (pBT)		TOEFL Internet Based (iBT)	
Overall Score	Writing	Total Score	Essay Rating	Total Score	TWE(Test of written English)	Overall Score	Writing
6.5	6	237	4.5	570	5	90	21

*引用URL <http://www.uq.edu.au/study/index.html?page=5445>

- 4) 高校生受検者も多いTOEIC Bridgeの総受検者は128,900名（公開テスト3,600名、IPテスト120,000名）であった。
- 5) TOEICは2技能（リスニング・リーディング）に重きを置く試験であると認識されてきたが、2006年度からETSのTOEFL iBT試験方式でTOEICスピーキング・ライティングテストが、正式に開始された。TOEIC運営委員会ホームページによると、「TOEICスピーキングテスト・ライティングテストは国際的な職場環境において、効果的に英語でコミュニケーションをするために必要な、話す、書く能力を測定するテスト」として研究開発された。この試験はスピーキングテスト(約20分・11問)とTOEICライティングテスト(約60分・8問)から構成されている。2007年1月21日～8月5日の間に計8回実施され、1807名（各回平均225.9名）が受検した。現在、日本ではTOEFL iBT受検希望者を全員収容できる試験会場の設置が進んでいない。iBT方式によるTOEICが日本に定着するには、今後かなりの時間が必要となると思われる。
- 6) 大会名称は、“GlobEng: International Conference on *Global English*”。この学会は、前述のCrystal D.、“World Englishes: A resource book for students”のJenkins J.やVOICE（後述）のSeidlhofer B.などを招待講演者としている。詳細は、以下のURL参照。（<http://profs.lingue.univr.it/globeng/index.html>）
- 7) “This indicates that idiomatic native-speaker language use can be a disadvantage in certain ELF interactions.” Seidlhoferは‘give you a hand’と‘in my book’を例として挙げている。以下は、OALD(2005)からの引用。

head . . . 3 a hand [sing.] (informal) help in doing sth: Let me **give you a hand with those bags** (=help you to carry them).

book . . . **IDM in my book** (informal) used when you are giving your opinion;
That's cheating in my book.

参 照 文 献

(以下の URL は、2007年10月13日現在のもの)

- Butcher, C.A. (2005) "The case against the 'native speaker,'" *English Today* 21/2, pp.13-24.
- Crystal, D. (1997) *English as a global language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Council of Europe, Language Policy Division (2001) "Common European framework of reference for languages: learning, teaching, assessment" Strasbourg: Council of Europe.
http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Source/Framework_EN.pdf
- Department of English, University of Vienna Vienna-Oxford international corpus of English.
http://www.univie.ac.at/voice/voice.php?page=research_perspectives
- ETS (2005) "TOEFL internet-based test score comparison tables", Princeton, NJ: ETS.
http://www.ets.org/Media/Tests/TOEFL/pdf/TOEFL_iBT_Score_Comparison_Tables.pdf
http://www.ets.org/Media/Tests/TOEFL/pdf/TOEFL_iBT_Score_Comparison_Tables.pdf
- (2007a) "TOEFL Test and Score Data Summary for TOEFL Internet-Based Test: September 2005-December 2006 Test Data", Princeton, NJ: ETS.
<http://www.ets.org/Media/Research/pdf/TOEFL-SUM-0506-iBT.pdf>
- (2007b) "TOEFL Test and Score Data Summary for TOEFL Computer-Based and Paper-Based Test 2005-2006 Test Year Data", Princeton, NJ: ETS.
<http://www.ets.org/Media/Research/pdf/TOEFL-SUM-0506-CBT.pdf>
- (2007c) "Mapping TOEFL to the Common European Framework Reference (CEFR)", Princeton, NJ: ETS.
http://www.ets.org/Media/Research/pdf/CEF_Mapping_Study_Interim_Report.pdf
- Graddol, D. (2000) "The decline of the native speaker" *Aila Review* 13, pp.57-68.
- (2006) *English next*, London: British Council.
- Hughes, A and Trudgill, P. (1996) *English accents and dialects: an introduction to social and regional varieties of English in the British Isles*, 3rd ed. London: Arnold.
- IELTS (2007) "Test taker performance 2006".
<http://www.ielts.org/teachersandresearchers/analysisoftestdata/article382.aspx>
- Jenkins, J. (2003) *World Englishes: a resource book for students*. London: Routledge.
- Kachru, B. B (2005) *Asian Englishes today: Asian Englishes beyond the canon*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Kachru, Y. and Nelson, C. L. (2006) *Asian Englishes today: world Englishes in Asian contexts*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Martyniuk, W. & Noijons, J. (2007) "Executive summary of results of a survey on the use of the CEFR at national level in the Council of Europe Member States" Strasbourg: Council of Europe.
http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Forum07_webdocs_EN.asp#TopOfPage
- McArthur, T. (2004) "Is it world or international or global English, and does it matter?" *English Today* 20/3, pp.3-15.

- Seidlhofer, B. (2001) "Closing a conceptual gap: the case for a description of English as a lingua franca," *International Journal of Applied Linguistics* . 11/2 pp.133-158.
- (2004) "The VOICE of ELF - English as a lingua franca". *What's New?* Autumn/Winter 2004 , pp.8-9.
- (2005) "English as a lingua franca" in Wehmeier, S. (2005) *Oxford advanced learner's dictionary of current English*, seventh edition. Oxford: Oxford University Press. R 92.
- Toolan, M.(1997)"Recentring English: new English and global" *English Today* 13/4 pp.3-10.
- Trudgill, P. and Hannah, J.(1982) *International English: a guide to varieties of standard English*, London: Edward Arnold.

(和文)

- 国際ビジネスコミュニケーション協会(2007a)「TOEIC 運営委員会TOEIC 公式ホームページ TOEIC テスト公式データ」東京：国際ビジネスコミュニケーション協会
<http://www.toeic.or.jp/toeic/data/data.html>
- (2007b) TOEIC テスト Data & Analysis 2006 東京：国際ビジネスコミュニケーション協会
- (2007c) TOEIC Bridge Data & Analysis 2006 東京：国際ビジネスコミュニケーション協会
- 文部科学省(2003)「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/03033102.pdf
- 日本英語検定協会(2007)「過去3年間の年度別受験状況」東京：日本英語検定協会
<http://www.eiken.or.jp/situation/last3year.html>
- 田辺洋二(2004)『「国際英語」は「国際言語」か』*Dialogue* 2004 Vol.3 東京：TALK(田辺英語教育学研究会) pp.37-52
http://talk-waseda.net/dialogue/no03_2004/2004dialogue03_k3.pdf